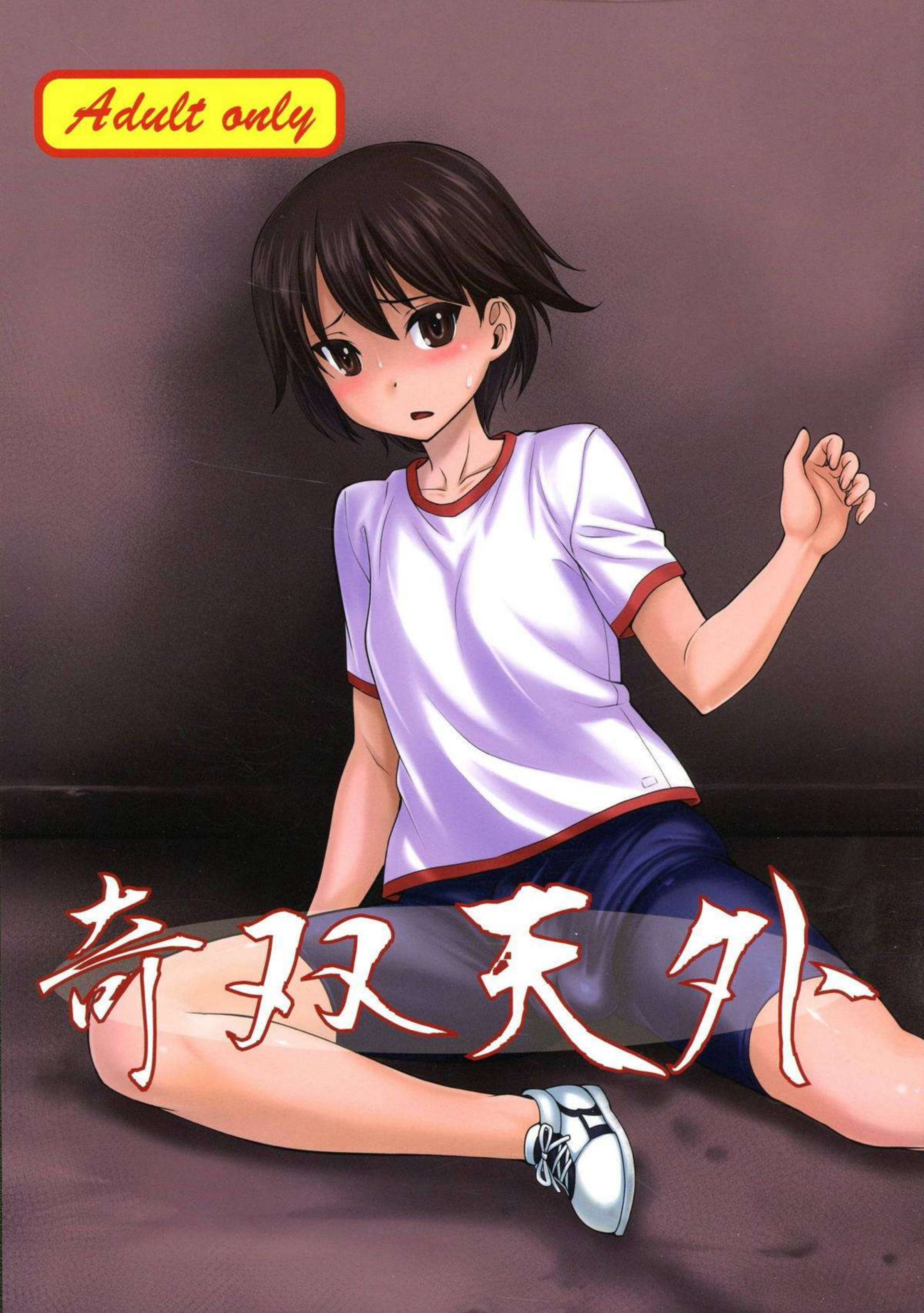
Adult only
奇形天孔

目　次

表紙　イラストレーション　流一本
中扉　イラストレーション　流一本
目次＆まえがき　2
こみっく＆イラスト
（ガールス＆パンツァー）　流一本　3
SS　服従するもの
（ガールス＆パンツァー）　白朧　13
奥付

まえがき（ページ調整のため）

くろうさぎ　このたびはお買い上げありがとうございます。
流一本　はぁ、海行って釣りしたい……。
白朧　はいはい、黙ってて。今年は鬼滅の刃が爆発的に流行だったね。
くろうさぎ　うちでもおもちゃの刀もって霹靂一閃が流行ってるなぁ。
白朧　今の子供は牙突やアバンストラッシュ言われてもわからんのだろうね
くろうさぎ　いやダイの大冒険は再アニメ化やするし、るろ剣も実写映画がある。
白朧　そうだったね。しかし今回は○○○○ものとは珍しく見える。
流一本　いや結構書いてると思うけどなぁ。キャプテン、ごめんよ……。

12月某日
劇場版 鬼滅の刃 無限列車編が楽しみです

今日の練習はここまで

おつかれさまでしたー

おい

アヒルさんチーム

最近どうした全く集中出来てないじゃないか！

アハハ

す…すみません

明日からはちゃんとやります

ペコリ

ったく頼むぞ

……

会長

トタ

トタ

彼女いつからスカートはいてましたっけ？

ん～さぁ？

ダメですよ
しっかり
してくれないと
私達まで
怒られちゃうじゃ
ないですか

で…でも
それは
みんなが…

あー
私達の所為に
するんですか？

あっ？

だっ…

だめっ

こんなにいやらしい
お〇んぽ生やして
私達の後ろでブラブラ
させてるキャプテンが
悪いんですよ❤

ああ❤

苦しそうに
してたから
みんなで代わりながら
抜いてあげてたのに

あっ

あん

はぁ

アルルさん
遅れてるぞ！

すっ…
すみませ…

カ

ゴゴン

まだ射精し足りなかったんですか？

や…

まって…

あっ

あはすご～い

なんだかさっきよりガチガチになってませんか？

ビクッ
ア…
アア♥
う…ううう
ガクガク
ガクガク
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ヴァアア♥♥
ビクッ
ビクッ

も…

許し…て…

[redacted]

[redacted]

ドクドク

まだまだ
これからですよ
キャプテン

根性ですよ
根性

あ

キャプテンの
お〇んぽ
大きくて
子宮口グリグリ
してるぅ

ずっ
ずっ
[redacted]

イク♥
イク♥
[redacted]
[redacted]
[redacted]
[redacted]
あっ♥
あ♥

ビクッ
ビクッ
[redacted]
びゅるる
びゅるる
お♥
おお♥

射精ちゃう
射精して
キャプテン
キャプテンの
チ○ポ汁
アアッ♥
んああ
キタぁ♥
はあん♥

私もぉ
ケツマ〇コセックス

ああん
カリに引っ掛かって
肛門が伸びちゃう

はああん

キャプテンの
ミルクが
うんこの通り道を
逆流してくるぅ

見て
キャプテン

私まだ処女なのに
肛門がこんなに
エッチになっちゃった❤

ゴポ

あ…❤
あ〜❤
素敵ですキャプテン
これからもずっとお世話してあげますね❤

服従するもの

「猟犬をメス犬に堕とすのは何度やっても飽きないねぇ」
女生徒の画像がいくつも映されていた。
黒森峰女学園の戦車部の部員達の姿だった。その画像には複数の男性と女性の性交場面が納められ、動画すら映し出されていた。男はスマートフォンから今回の指令文を送ると、つい笑みが零れてしまった。
「さて……、楽しみだねぇ」

「おはよう、西住さん」
「おはよう」
いつものように簡潔にはっきりと挨拶を返す。クラスメイトといつものようにロ々挨拶を交わしていく。
朝届いたメールの命令を実行しているまほには、挨拶を返すのは困難な状況だった。後ろ手でスカートを押さえながら椅子に座る。座る動作で膣奥のローターが動いて、子宮が疼いてくる。蜜液が滴ってくるのがわかるが、ショーツがないため、溢れないように意識して力みを入れる。
緊張と興奮で、乳首とクリトリスの勃起が収まらず、身じろぐたびに乳首が裏地にスレて痒みを与えてくる。
メールが伝えてきた命令は、放課後までこの状態ですごし、その後屋上へ来るようにというものだった。

数日前に後輩からの相談で会った男は、学校側の上層部にも顔が利き、戦車道連盟の理事の一人だった。後輩たちを守るために、体を捨て、犬と成ることをまほは受け入れた。
鉄の意思で、快楽を押さえきり放課後を迎えた。スカート押さえて刺激を与えぬようにゆっくりと立ち上がる。
ノーブラノーパンで、乳首を糸で縛り、ラビアにクリップを止め、膣にローターを仕込んでいる。上気した頬も、濡れた瞳も、恥らって震える様子も、まほの美しさを損なわず、むしろ彩っていた。
まほはふら付く足取りで、屋上へと繋がる階段を登っていた。
「はッ、はぁッ……、はぁッ」
歩く動作でクリップが繋がれたラビアが揺れ、勃起しっぱなしのクリトリスがスカートの裏地に接触する。糸で括られた乳首は痺れてしまって感覚が麻痺していた。ノーブラの乳房が制服の中で揺れるたびに疼いてくる。
歩く動作でローターが膣口まで降りてくるので、筋肉を締め付けローターの位置を調整する。
ゆっくりと屋上のドアに近づくと、夕日が差し込んでまほを照らす。
―もう少して……―
重い体を引きずるように階段を歩いていく。ようやくドアにたどり着き、ノブを回しでドアを押し開くと、夕暮れの風が吹き込んできて火照った肌を冷やしてくれる。
ドア横にもたれ掛かっていた男に雪崩れるように倒れこんでしまう。
黒髪が風で揺れ、焦点の合わない瞳が潤んでる。堪えきれないように男の腕はまほのの肢体を掻き抱くように包み込む。

「実に美しいね」
「離してください」
快感に耐え続けた体からは、信じられないような膂力で男の腕を振り解くこうとする。
「ふふ、訓練の行き届いた猟犬は、命令には服従したまえ」
男の放った言葉に、後輩の事を思い出し、解こうとした力を緩める。
男の手がまほのスカートへと伸び、膣口から零れそうになってるローターを手に取り動かし始める。まほの秘部は、赤く充血して淫猥さを増していた。クリップの銀色が夕日を反射させ、その間の秘口にローターを押し当てる。ゆっくりと動かし、膣口へと沈めていく。
「んッ」
奥に挿入すると男はローターのスイッチを操作する。
「あッ！　はッ、はぁッ……んんッ、んッ！」
まほは、足を組み替え、腰を回転させて悶える。振動がまほを翻弄し、腰を揺らせながら身悶える。膣奥で振動するローターは子宮ごと体を揺さぶって、果てそうになる寸前に、ローターの振動が止まってしまった。
イく寸前で止められ、欲望が募るが、この男を喜ばせているのだと思うようにして欲望が消沈させていく。
「ローターを取り出してごらん」
内心はどうあれ男の言葉には逆らえず、ため息をつき、意識的に緊張を緩めた。下肢の間から、零れるようにローターが落ち、下肢に力が入らずそのまま膝を折ってしまう。
「おっと」
すぐさま男が腕を取りまほの体を支える。
まほの前で、ファスナーをゆっくり下ろし、男根を引っ張り出した。
「舐めてごらん」
まほはそのまま膝を地に着きしゃがみこむと、根本を両手の指で持ち、男根を舐め始める。彼女の赤い舌先がペニスを舐めている様子を見ながら男は笑みを浮かべる。
男の要求が進み、まほは制服のボタンを外し、乳房を露出させる。赤い紐で括られた乳首が、糸よりも鮮やかに赤く充血して振るえている。
男がゆっくりと紐の結び目を解くと、汗で濡れた胸の谷間に肉茎を挟んでくる。
「んッ、はぁッ……はぁッ……」
嬲るように乳首を弄ぶと、まほは身を捩るように悶えた。
「あッ……あぁん、んッ……あぁッ」
乳首の悶えるような熱さが広がり、身体が敏感になっていて、風にさえ興奮を覚えてしまう。
「あぁッ、はッ、はぁッ、だ、だめッ……、熱いッ！」
男は乳首を弄る手を休めようとはせず、まほは秘部が濡れ火照り、疼いているのが自覚できた。疼きはどんどん酷くなっていく。
「ひッ、ひぁッ、く、狂っちゃうッ……、熱いッ！　は、はぁッ」
まほが乳房の間から伸びる肉茎に舌を伸ばす。先走りを舐め取るようにして亀頭を舐めまわす。先端の尿道口に舌先でこじ入れるようにして舐めいれる。
「まず、一回ッ」
男根が大きく動き、精液を振り撒く、噴出した精液に顎や胸を白く濡らされ汚されてしまった。
「では、舐めて綺麗にしてくれたまえ」
当然のように男が命令し、まほは草臥れかけた亀頭を咥え、口唇に溜まる精液を飲み干していく。

まほは、舌の腹で亀頭を押さえて射精の勢いを殺して咳き込まないようにしながら、口唇に溜まる精液を嚥下していく。射精途中の亀頭が、唾液の乗った舌先で舐めていく。

まほの綺麗な顔は汗と唾液と男の精液で汚れ、紅唇がペニスを咥える下に、双丘が丸い稜線を引いてる様子が見えた。その光景は男の五感に刺激を与えてくる。

まほは亀頭を舐め回して、必死に抑えているが腰の動きはお預けされた犬の尻尾の様に揺れていた。

焦らすのも勿体無く、男はまほの手首を掴み、フェンスの方へと押し付ける。

「こちらへ」

「くッ……」

制服は乱れ、胸が剥き出しになり、捲れ上がったスカートは少し角度を変えれば秘部が見えそうだった。

フェンスに胸を押し当てて震えている。亀頭をスリットで擦られ、愛液で濡れているラビアがいっそう疼く。

濡れそぼってる秘部から尻へと亀頭を押し当てて、焦らす。まほの背中が震えのを満足に見下ろしながら、ペニスを突き入れる。

男のペニスが膣襞に沈んだ。秘部の挿入を感じ取って愛液を噴き出させる。亀頭がおくに沈むにつれ、エラの部分がGスポットを掻きながら侵入し、まほの躰が震える。

「んんッ、くッ……、ははぁッ」

ずっとローターでほぐした膣は、男のペニスを望むように受け入れていた。半分も挿入しないうちにまほの躰に痙攣が走る。

先ほどまで入れていたローターの感覚を熱くて硬い男根の塗り替えていく。

「ん、はあぁぁんッ！」

亀頭が膣奥に当たった瞬間、まほは軽く達したようだった。

男は両の乳房を握りしめ、ゆっくりと腰を動かしはじめた。

「あぁッ、ダメッ、ひッ、……あぁッ」

亀頭のエラが、膣壁の中央を掻きながら前後させる。男は感触を楽しみながら腰を動かしていく。

「うッ、あぁッ……くッ！」

まほは背筋を反らせながら、膣襞が蠢かせる。膣壁が蠢動しペニスを引き込んでいく感触を味わう。まほの躰がペニスを欲しがっているのを満足気に笑みを浮かべる。

男はなおも奥に突きこみ、子宮口にペニスを押し付けていく。溢れる愛液の匂いが漂っている。

「ああッ、……も、もうッ！」

まほの全身が震え、フェンスを掴んだ指先が白くなるほどしがみついていた。さらにペニスを往復させる。

「あッ、ひぃんッ、うぐッ……」

まほの鍛えた肢体が弓なりに反って硬直する。筋肉が収縮して、フェンスを握る指にさらに力を込める。

汗にまみれた臀部が突き出され、膣ヒダがさらに吸い付くように締め付け、男根に絡み付いてくる。

「まったく締りのいいヴァギナだね」

男は両手を回し、乳房を握りしめる。指の間に乳首を挟みながら揉み解す。

「イ、イヤッ、……ヒッ、んんッ」

眼下で悶えてるまほに対して、男はまほの腰を持ち直すとさらに激しく男根を打ち付けてくる。ペニスが深く突き入れられるたびに、火照った体に冷えたフェンスが押し付けられる。

後背位で、激しく突き入れられるペニスは、身体ごと子宮に押し付けるようだった。

「あぁあッ、はぁんッ！」

まほの絶頂に合わせるように、さらに激しく打ち付けてきた。まほの臀部と男の下腹部が当たる音が響く。乳房をフェンスに押しつけて、さらに追い込んでいく。

頬と乳房をフェンスに押し当て、積み重なる絶頂に悶えまくる。

「くッ、んはぁッん！」

結合部は男根を咥え込んでる秘部とお尻の穴が抜き差しに合わせて収縮していく。

男根から欲望が吸いだすように膣ヒダが締まり、精液を吐き出すペニスを膣奥深く挿入し、解放させる。

「うッ」

男の欲望が大量にまほの膣内を蹂躙していく。

フェンスを掴んでいたまほの指から力が抜け、崩れ落ちそうな身体を支える。

まほは、男に腹部を抱えられ、膣にペニスを貫かれて支えられ、ようやく倒れずにいる状態だった。

ぐったりとしたまほを支えながら、ペニスをゆっくりと引き抜くと、膣口から精液が零れる。

ゆっくりとまほは床に膝をついてへたりこんだ。横座りになって息を荒げる。

横たわったまほを見つめていると、犬としてどこまで従うか試したくなってくる。

「まほくん、次は……、そうだね、ご家族と一緒……、というのはどうかね？」

この命令に犬として服従するのか、反逆してこちらの喉笛を噛み切りに来るのか実に興味深かった……。

終幕

奥付

発行　リーフパーティー
発行日　2019/12/31
発行人　くろうさぎ

ホームページアドレス
http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/

印刷所　　大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止

LeLeばつば
Vol.36